

中国資料に見られるオ段長音の開合の音価と統合

馬之濤

1. はじめに

室町末期においてオ段長音の開合の別があることはキリシタン資料、謡曲伝書、及び仮名遣書などにより認められる。その統合過程は橋本進吉(1928)によって開音: au > ao > ɔ: > ɔ:, 合音: ou > oo > ɔ:と解釈されている。しかし、キリシタン資料のローマ字表記が表記である以上は、一定の写音法則に従ったとも考えられ、実際の音価との間には距離があると思われる。謡曲伝書、仮名遣書は記述による音声描写で、それに対する解釈も先学の間で意見が分かれている。

明代中国資料の中には『日本国考略』など、所拠言語が呉方言である資料がある。呉方言、例えば寧波方言は/o/と/ɔ/を持つ音韻体系を有し、さらに19世紀以前には/ao/も存在していた。こうした/o/ /ɔ/ /ao/の音韻対立をもつ言語の資料は、日本語の開合を分析するうえに実に貴重である。本稿では中国資料を通して、アウ・オウなどの連母音が長音化する順序や、いわゆるオ段長音の開合の別、その音価及び統合の過程を考察する。

具体的な議論に入る前に、本稿でよく使う用語について説明しておきたい。アウ連母音やオウ連母音が長音化し、いわゆるオ段長音になってから、開音と合音というものがはじめて成立する。連母音が長音化を起こす前には、開音でも合音でもない。もちろん、開音あるいは合音と呼ぶべきでもない。ただし、以下の考察からも分かるように、中国資料が反映した連母音の中には、すでに長音化しているものと、していないものがある。それゆえ、ここでは論述の便宜上、長音化していないものも開音または合音と呼ぶことがある。また、アウとアオの連母音はアウ連母音、オウとオオの連母音をオウ連母音と呼ぶ。

2. 先行研究

周知の通り、ロドリゲス『日本大文典』、イエズス会『日葡辞書』などのキリシタン資料ではオ段長音のなかで、アウ連母音に由来するものを δ 、オウ連母音に由来するものを δ と表記している。仮名遣書ではそれらを「ひろがる」「すばる」と呼

び、それぞれいわゆる開音と合音とに対応する。

音変化の過程については、開音が $au > ao > \text{ɔ}$ 、合音が $ou > oo > \text{o}$ という変化を経て、それから開音と合音がさらに一つの o に統合した、という橋本説が現在ほぼ通説になっている。

一方、これに反対する意見もある。川上蓁(1980)では「その前もあとも五母音で安定していた日本語がその一時期だけ六母音であったとは、ほとんど考えられないことである」と指摘し、開音の音価を $[\text{o}]$ ⁽¹⁾、合音の音価を $[\text{ou}]$ とし、開合の別を長母音と二重母音との対立と推定した。

豊島正之(1984)は、謡曲伝書や仮名遣書を精査して、開合の音変化の過程を次のように推定した。

開音 : $au \rightarrow *ao$ ⁽²⁾ $\rightarrow oo = oo$
 合音 : $ou = ou \rightarrow oo$

川上(1980)と豊島(1984)の指摘通り、通説となっている橋本説の音価の再構には疑問点がある。しかし、川上説と豊島説にも、以下に述べるように音声学的に説明しにくい点があり、更なる検討を要する。

ほかに浜田敦(1955)は早くから中国資料の考察を行っているが、『日本国考略』などの呉方言資料について、所拠言語との対照研究には不十分なところもある。大友信一(1963)の研究は『日本国考略』『日本風土記』『日本一鑑』などの多くの資料にわたって展開されており、大きな成果を収めた。そこでは以下のように開合の混同の時期を推定している。

「お」段長音開合については、従来キリシタン資料を基礎として、「お」段長音開音と「お」段長音合音とは、殆んど混同していないという事であったが、必ずしも、この事を裏付ける結果が得られたわけではなく、逆に、『日本国考略』当時から、すなわち一五〇〇年頃から次第に混同の方向に向っていたのではないかと推測される。しかし、大むねは区別があり、キリシタン資料との差は、程度の差という事になる。(大友 1963:708)

大友(1963)も橋本説に従いながら、中国資料における開合の混同そのものに着眼している点、従来の多くの研究と異なるものではない。

福島邦道(1993)では『日本国考略』の著者がオ段長音の開合について「十分な把握をしていなかった」、「厳密に ɔ と ɔ をよく識別して、音訳漢字をえらんでいたかどうか疑わしい」(:253)と述べるように、中国資料に対して不信を示している。『日本国考略』の著者の母語に対して十分な把握をしていないために、このような不信を抱くことになったのであろう。 $/\text{o}/$ $/\text{ɔ}/$ $/\text{ao}/$ の三つの韻母を持つ寧波方言を母語とする『日本国考略』の著者は、開音と合音を意識的に識別する必要もなく、自然

に聞き分けられたはずである。それにキリシタン資料や他の資料と異なり、『日本国考略』では一つひとつの音節に当たる音注漢字が一定していない。すなわち固定した写音法にとらわれず、聞いたままの日本語音を写している。『日本国考略』が写音資料として貴重なところは、まさにこの点にある。

3. 中国資料の考察

上に述べたように、オ段長音は開音が[ɔ:]、合音が[ɔ:],そして合音の母音がオ段短音と同じであるとされている。開合の問題を解決するには、オ段短音が音韻体系にあることを前提として考えなければならない。以下では、中国資料に現れるオ段長音の開合音およびオ段短音の音注漢字を考察する。ここでは特に呉方言資料の『日本国考略』『日本図纂』『日本風土記』、及び北方方言の『日本館訳語』を使用する(同時期の中国資料には『日本一鑑』もあるが、固定した写音法に従ったものであり、開合音の混同を忠実に反映していないので、考察対象から外すことにした)。これらの中国資料に見られる開合に関わる語を、キリシタン資料と照らし合わせ、先行研究による解釈を検討する。さらに韻書や寧波西洋人資料⁽³⁾などの中国側の資料で再構された呉方言音、北方方言音に基づいて、開音と合音の音価を推定する。

3.1. 『日本国考略』

『日本国考略』の音注漢字を中古音の分類によって下にまとめる(音価は19世紀の寧波方言再構音⁽⁴⁾、数字は用例数、二重下線は混同らしいもの、下線は誤刻、またはその他の理由があるかと疑わせるものを示す)。

《開音》	
效撰	[ao]報1(バウ) / 老1(ラウ) / 倒1(タウ) [iao]刁1吊1(チャウ) / 効1耀1(ヤウ)
宕撰	[ɔŋ]剛1(カウ) [uɔŋ]黄3(アウ) / 王1(ワウ) [iɔŋ]常1(シャウ)
假撰	[uo]花1(ハウ) [yo]下1(ヤウ)
果撰	[o]和 <u>1</u> 賀 <u>1</u> (アウ) / 哥 <u>4</u> (カウ) / <u>多</u> 1(タウ) / <u>羅</u> 1(ラウ)
通撰	[oŋ] <u>松</u> 1(サウ)

《合音》《オ段短音》

果撮	[o]阿 13 何 12 河 5 倭 4 (オ) / 何 1 倭 1 (オオ) / 哥 8 个 7 科 3 課 1 (コ) / 哥 3 柯 1 科 1 个 1 (ゴ) / 哥 1 (コウ) / 梭 3 鎖 1 (ソ) / 梭 1 (ソウ) / 多 15 惰 1 (ト) / 陀 4 (ド) / 大 1 (ドウ) ⁽⁵⁾ / 多 3 (トオ) / 那 3 糯 2 奈 1 (ノ) / 坡 1 (ホ) / 婆 1 (ボ) / 羅 2 (ロ)
遇撮	[u]烏 2 (オ) / 烏 3 (オオ) / 古 2 姑 1 (コ) / 姑 1 (ゴ) / 所 1 踈 1 蘇 1 (ソ) / 奴 4 (ノ) / 奴 1 (ノウ) / 暮 1 (モ) / 路 2 盧 1 (ロ)
通撮	[oŋ]翁 1 (オオ) / 空 3 公 1 (コ) [oʔ]木 4 (モ) / 禄 2 (ロ)
流撮	[iu]由 1 (ヨウ)
山撮	[un]漫 3 滿 1 (モ) [un]寬 1 (コ) [aʔ]達 1 (ト) / 達 1 (ド) / 發 1 (ホ) [oʔ]掇 2 (ト) [əʔ]末 4 (モ) [yiʔ]月 1 (ヨ)
效撮	[iao] 妙 1 (ニョウ) / 姚 1 (ヨウ) / 邀 1 (ヨウ)
假撮	[ɔ]沙 1 (ソ) / 拏 1 (ノ) / 麻 1 (モ)
江撮・宕撮	[oŋ]昂 1 (ノ) [ioʔ]学 1 (ヨッ)

3.1.1. 效撮・宕撮の音注漢字

效撮と宕撮の字は合音より開音に用いられている。『日本国考略』では效撮と宕撮の一等字 (i 介音のないもの) は開音の直音に、三四等字 (i 介音のあるもの) は開拗長音に当てられている。

寧波西洋人資料により、效撮と宕撮の韻母の音価はそれぞれ[ao] [oŋ]などと再構することができる⁽⁶⁾。現代中国方言においては效撮は二重母音で現れることが多く、宕撮は多く主母音が後舌広母音で現れる。例えば、以下の通り。

效撮「報」：北方方言_(北京) [pau]、粵方言_(広州) [pou]、客家方言_(梅県) [pau]

宕撮「黄」：北方方言_(北京) [xuan]、粵方言_(広州) [wɔŋ]、客家方言_(梅県) [fɔŋ]

效撮については現代寧波では[ɔ]である。徐通鏞 1990 の再構によれば 19 世紀から現代にかけて[ao] > [ɔ]という音変化を起こしたと思われる。一方、呉江 (現在蘇州市) の人である翁広平が撰した『吾妻鏡補』(1815) や玉燕の『東語入門』(1884) という呉方言による 19 世紀の中国資料がある。そこでは、オ段長音を果撮と假撮

の字のみで表わし、效撰の字（拗音の音注を除く）を使わない点において『日本国考略』などの16世紀の資料と異なる（例えば、『吾妻鏡補』「神戸 苛勃（カウベ）」「商議 沙談手（サウダンス）」、『東語入門』「沈香 勤誇（ジンカウ）」「可憐 卡滑以沙（カワイサウ）」）。考えられる理由は、19世紀の呉方言における效撰が二重母音であったから、この時期にすでに開合の統合を遂げた才段長音に相応しくないものとなっていたことである。これは、呉方言の效撰が19世紀以前に二重母音であったことの根拠ともなる⁽⁷⁾。

宕撰は現代寧波では[ɔ̃]である。19世紀から現代にかけて[ɔŋ] > [ɔ̃]という音変化を起こして鼻母音化したわけである。なお、各方言においても広母音+鼻音韻尾のような音節で現れることが多いから、16世紀の寧波でも[ɔŋ]に近い音であったと推測される。

こうして16世紀の寧波方言における效撰と宕撰の主母音はそれぞれ二重母音と広母音であり、19世紀のそれとさほどの相違はないと考えられる。かえって、效撰と宕撰の字が開音に当てられていたことはその傍証にもなる。従って、效撰と宕撰の字は開音に相応しい音注であると言えるのである。

ところで效撰と宕撰の両方の字が当てられていることから、開音の音価は[au]なのか、[ɔ̃]なのかという問題が出てくる。二重母音[ao]である效撰の字が用いられることは開音が[au]であったことを思わせるが⁽⁸⁾、単母音[ɔ̃]を持つ宕撰の字の使用は必ずしも開音が[ɔ̃]であったことの根拠にはならない。例えば、

232 盒子 剛白哥（カウバコ）、241 扇 黄旗（アウギ）⁽⁹⁾

などの例では「剛」「黄」のいずれも濁音の前に置かれている。それは濁音の前にある入り渡り鼻音を写すために用いられたのである。一方、キリシタン資料では、濁音の前の \ddot{o} 、 \hat{o} とonとの間に交替現象があると森田武(1993:186-187)は報告している。例えば、

jongue^{ジャウ}（上下 f. 245/11）、vonzon^{ワウ}（王孫 f. 259/1）

このように、濁音の前の連母音が長音化しやすかった可能性も考えられる。

3.1.2. 拗音優先

直長音の開合と並行して、拗長音の開音が[iau]であったとすれば、合音は[iou]であったと考えるのが自然である。しかし效撰三等の字[iao]は開音のみならず、合音にも用いられている。これについて大友(1963)は「開合音よりは(直)拗音に留意した結果の音注と考えるべき」と指摘した。開合の別より直拗の違いの方が中国人にとって顕著な音声特徴であったということである。そのため、拗長音の音注に[i]介音を持つ效撰三等の字が優先的に用いられたというのである。ところが、寧波

方言では合音に相応しい音節[iou]がなく、合音の拗音を写すのに效撰三等の字[iao]、および流撰三等の字[iu]を使わざるを得なかったのである。このことは19世紀の寧波方言の音韻体系からも証明できる。19世紀の寧波方言において、介音[i]を持つ音節[iao]（效撰）、[iu]（流撰）、[iɔʔ]（江宕撰入声）はあるが、[iou]は存在しない⁽¹⁰⁾。それゆえ、效撰三等の字が開合の両方に使用されるのは寧波方言側の事情によることであり、日本語側の開合の混同とは無関係である。

【表1】

寧波方言		16c 前半の日本語
效撰[iao]	→ ↘	開音[iaɯ]
×[iou]		合音[iou]
流撰[iu]	↗	

3.1.3. サ行とワ行の子音優先

53 皇帝 天王家里 (テンワウ△△⁽¹¹⁾)

55 百姓 別姑常 (ヒヤクシャウ)

86 和尚 烏常 (オシャウ)

上に挙げた55と86においては、当該音節の後に濁音が現われないにも関わらず宕撰の字を使っている。「常」の使用はおそらくサ行子音に配慮した結果であると思われる。拙稿(2013)に述べたことがあるが、サ行音のシ、シャ、シュ、シヨの子音は[ɕ] (または[ʃ]) であり、開音シャウは[ɕiaɯ]である。しかし、19世紀の寧波では、效撰に音節[siao]はあったが、[ɕiao]や[ʃiao]は存在しなかった。そのため、宕撰の「常」[ʃiɔŋ]を代用した可能性がある。

53の「王」はその後の文字が読めないという事情もあるが、寧波方言には效撰が音節[uao]を持たず、ワ行のワウ[wau]を写すために宕撰の[uɔŋ]を代用した可能性も考えられる。

3.1.4. 假撰の音注漢字

「250 箒 花鷄 (ハウキ)」のハウを写すのに假撰二等合口の「花」を利用した理由については、拙稿(2014)ですでに検討したように、ハ行子音が両唇摩擦音[ɸ]であったということに求められ、両唇性の子音を写すということが優先された例と考えられる。

假撰匣母の「下」は「143 快來 発下何耶俚 (ハヤウオヤレ)」という項目にある。

浜田(1951)、大友(1963)は「発下」をハヤウと解説しているが、「下」をヤウに読むことについては特に説明していない。そのことについて一言補足すると、寧波西洋人資料によれば、「下」は音節[fiyo]であり、現代寧波方言においても[fiɔ]または[fiyo]⁽¹²⁾と読まれて、介音[y]の有無が文読音と白読音の違いになっている。16世紀当時においても文読音[fiyo]と白読音[fiɔ]が併存していたであろう。ほかに両読されている、同じ假撰二等の字としては、例えば「家」が挙げられる(表2参照)⁽¹³⁾。

以上のことから、「下」はその文読音[fiyo]によりヤウに当てられたということになる。二重母音[iao]の字、例えば「遥」を使用せずに、「下」を使用したということは、「早う」が[iɔ]であったことを反映していると考ええる。

【表2】

假撰二等	文読	白読
下	[fiyo]	[fiɔ]
家	[tɕyo] ⁽¹⁴⁾	[kɔ]

3.1.5. 果撰の音注漢字

寧波西洋人資料において果撰の韻母は[o]であった。『日本国考略』では合音やオ段短音に当てられる字のうち、最も多いもので、合音に相応しい音注漢字と言える。合音の音価は長音[o:]であるか連母音[ou]であるかという問題については、当時の寧波方言に[ou]という音節がなかったと推測されるため、どちらとも簡単に決めることはできない。しかし果撰の字はオ段の短音にもっとも多く使われており、また『日本風土記』では[ou]を写す際に二字音注を使うことがあるから(3.2参照)、ここに一字音注で合音を写しているということは、合音が長音であったと考えた方が合理的である。それについては以下に述べるところがある。

混同については次の項に述べることにするが、以下の4例は混同例から除外すべきかもしれない。

- 264 香 宣哥 (センカウ)
- 265 沉香 沉哥 (ゼンカウ)
- 266 麝香 射哥 (ジャカウ)
- 267 木香 木哥 (モッカウ)

通し番号が連なっていることから分かるように、この4項目は並列されているものである。類推で「香」カウを「哥」であらわすように統一した可能性が考えられるが、合音に使うべき「哥」をカウに用いたことは開合の混同を示しているかと思われる。

『日葡辞書』を調べてみると「香」はほとんど開音 cōと表記されている。cōと表記するのは1例(香百芷 Cōbiacuxi)のみであり、誤植の可能性を排除できない。

他の中国資料に照らし合わせると、『日本館訳語』では「香(カウ)」の音注に「稿」を用いている(例えば「麝香 世牙稿(ジャカウ)」。所拠方言が北方方言という点

で写音体系は『日本国考略』と異なるが、下にも述べるように、「稿」の音価はおそらく[kau]であったろうから、アウの連母音を写したものと思われる。

一方、『日本国考略』を参考にして、その一部の寄語を転載した『日本風土記』では、この4項目をすべて「香料」という類に収めている。「松香」「丁香」などの新項目を増補してはいるものの、これら4項目の順序は『日本国考略』と同じである。そこにおいてカウの音注漢字が直され、「哥」から「高」になっているところに注目したい。

香 高 (カウ)
 沉香 沉高 (ヂンカウ)
 麝香 射高 (ジャカウ)
 木香 木高 (モッカウ)

同じ呉方言による写音資料のため、效撰の「高」は二重母音[ao]であったと考えよよいであろう。「高」はカウ[kau]に適切な音注漢字である。面白いのは字形上、「高」と「哥」とはかなり近似しているものであり、「哥」は「高」の誤刻であった可能性がある⁽¹⁵⁾。

3.1.6. 鼻音韻尾の音注漢字

合音の音注漢字には、果摂でなく、通摂や山摂及び宕摂といった、いわゆる鼻音韻尾を持つ漢字の使用が見られる。その理由は、それに続く音節が濁音音節であることに求められる。例えば、次のようである。

45 金 空措泥 (コガネ)
 110 乞丐 寬需計 (コジキ)
 136 去 漫陀羅 (モドラウ)

濁音を表わすために、鼻音韻尾の字を優先させるわけである。

3.1.7. 開合の混同

ここでは混同と思われるものについて検討する。まず開音が期待されるところに合音の音注漢字が使われる例を挙げる。

174 老实説話 買多溢多 (マッタウ△△)
 177 買 加和 (カワウ)
 187 換 皆賀 (カワウ)
 192 咲 歪羅 (ワラウ・ワラワウ)
 355 不是 松田乃係 (サウデナイ)

174の「全う(マッタウ)」は『日葡辞書』でも「Mattô マットウ(全う)」のように合音としており、偶然の一致ではなかろう。他の4項目も漢語でなく、和語、とくに動詞の意志形であり、しかも使用頻度の高い語であるところに共通点がある。これらは早い段階に合音になった可能性があると考えられる。

次は、短音[o]が期待されるところに[ɔ]の漢字を用いた例である。

- 290 醬 弥沙(ミソ)
 253 鋸 拏剛擊利(ノコギリ)
 271 衣服 乞麻俚(キモ△)
 277 手巾 達昂个(タノゴ□)⁽¹⁶⁾

3.2. 『日本図纂』『日本風土記』

次は同じく呉方言の資料、『日本図纂』と『日本風土記』を調べる。『日本図纂』においては、記録された日本語の大半が『日本国考略』から転載したものである。『日本風土記』では語彙を大量に増補しているが、『日本国考略』と『日本図纂』から転載したものもある。しかし、寧波方言のように/o/ /ɔ/の音韻対立を持つ方言は呉方言の全域において広く見られる。『日本図纂』と『日本風土記』の所掲言語が呉方言であれば、寧波方言との間にさほどの相違はないと想定してよいであろう⁽¹⁷⁾。しかも、両書の音注漢字の使用特徴が『日本国考略』に近いことも分かったので、ここでは両書の音注漢字を寧波方言の音価で示すことにする。また『日本国考略』と似た考察結果を得たので、以下の検討は主に開合の混同について行うことにする。

『日本図纂』⁽¹⁸⁾

《開音》

- 效撰 [ao]島2(タウ) / 飄1(ヒャウ)
 假撰 [uɔ]話1(アウ) / 花1(ハウ) / 話1(アオ)
 宕撰 [ɔŋ]康1(カウ)
 [uɔŋ]王1(ワウ)
 果撰 [o]哥2(ガウ) / 那1(ナオ)

《合音》《オ段短音》

- 果撰 [o]倭1⁽¹⁹⁾ 阿1(オオ) / 多1(トオ) / 倭2(オオ) / 哥1(コオ)
 / 哥1(ゴオ)
 遇撰 [u]烏1(オオ)

『日本風土記』⁽²⁰⁾

《開音》(- は二字音注を示す)

- 效撰 [ao]高 11 稿 1 (カウ) / 傲 1 (ガウ) / 曹 3 (ザウ) / 曹 1 (サオ) / 刀 3 滔 2 倒 1 掏 1 (タウ) / 陶 1 (ダウ) / 毛 1 (マウ) / 袍 5⁽²¹⁾ (バウ)
- [iao]交 1 (キヤウ) / 少 3 小 2 紹 2 硝 1 交 1⁽²²⁾ (シヤウ) / 饒 1 召 1 (ジヤウ) / 兆 1 紹 1 (ヂヤウ) / 瓢 1 瓢 1 (ビヤウ) / 苗 1 描 1 (ミヤウ) / 要 1 (ヤウ)
- 宕撰 [oŋ]唐 1 (タウ)
- [uoŋ]黄 3 (アウ)
- 梗撰 [iŋ]正 1 (シヤウ)
- [uoʔ]画 1 (ワウ)
- 假撰 [uo]華 - 戸 1 瓦 1 (ワウ) / 化 1 (ハウ)
- 咸撰 [aʔ]法 - 戸 1 (ハウ)
- 山撰 [əʔ]活 - 戸 1 (ワウ)
- 果撰 [o]婆 4 (バウ) / 火 1 河 1 (ハウ) / 俄 1 娥 1 (ガウ)

《合音》《オ段短音》⁽²³⁾

- 果撰 [o]倭 1 (オ) / 和 32 何 15 河 6 (オ) / 和 6 (オオ) / 哥 16 箇 15 科 6 過 2 課 1 果 1 柯 1 (コ) / 俄 14 我 5 娥 3 哦 2 蛾 3 玦 1 (ゴ) / 過 1 (コウ) / 過 3 過 - 屋 1 (コオ) / 梭 1 (ソ) / 多 67 陀 2 (ト) / 陀 3 (ド) / 多 - 和 1 多 1 (トウ) / 那 89 奈 1 糯 5 捺 2⁽²⁴⁾ (ノ) / 那 1 (ノウ) / 貨 1 (ホ) / 婆 2 (ボ) / 貨 1 和 1 (ホウ) / 磨 1 (モ) / 羅 3 樂 1⁽²⁵⁾ (ロ)
- [y]靴 1 (ヘウ)
- 遇撰 [u]古 2 姑 1 酷 1 (コ) / 姑 1 吾 1 (ゴ) / 所 5⁽²⁶⁾ 酥 2 疏 1 (ソ) / 所 2 (ゾ) / 都 1 (トウ) / 奴 6 (ノ) / 蒲 4 (ボウ) / 路 1 盧 1 (ロ) / 龍 - 戸 1 (ロウ) / 烏 1 (オオ)
- 通撰 [oŋ]翁 6 (オ) / 空 4 公 2 弓 1 (コ) / 公 1 (ゴ) / 宿 6 聳 1 (ソ) / 從 1 (ゾ) / 東 2 (ト) / 同 1 (ドウ) / 蒙 1 (モ) / 隴 1 (ロ)
- [oʔ]屋 1 (オ) / 谷 10 (コ) / 秃 10 独 8 (ト) / 独 1 (ド) / 秃 1 (トウ) / 伏 5 幅 1 (ホ) / 撲 1 (ボ) / 木 36 目 4 (モ) / 欲 1 (ヨ) / 六 15 綠 3 (ロ)
- 流撰 [œ]頭 2 (ト) / 頭 2 (ド)
- 臻撰 [kwəʔ]骨 2 (コ)
- [fəʔ]勿 1 (ホ)

曾撰	[əŋ]能2(ノ) / 黙1(モ)
梗撰	[əʔ]得1(ト) / 白2 箔1(ボ)
	[hyoŋ]兄1(セウ)
山撰	[əʔ]末3(モ)
效撰	[ao]造1(ゾウ)
	[iao]紹2(ジョウ) / 小2(セウ) / 堯1(ネウ) / 梟1(ヘウ) / 搖
	11 效3 要1(ヨ) / 搖1(ヨウ)
宕撰	[uoŋ]黄1(オ)
	[ioŋ]昂1(ノ)
	[ɔʔ]各3(コ) / 莫1 膜1(モ)
假撰	[ɔ]麻1(モ)

3.2.1. 開合の混同

3.2.1.1. 混同か、他の理由によるか

『日本風土記』の次の例は、開音が期待される場所に合音の漢字音注が現れるものである。ただし、読み方が複数あって、一概に混同と見なすことはできないものである。

①河1：波菜 河蓮奈(ハウレンナ)？(ホウレンナ)？

『日本国語大辞典』(第二版 小学館、以下『日国』)では「菠薐草」にハウレンサウとホウレンサウの二つの読みがあがっている。後者には「ほうれん(菠薐)は唐宋音で、ネパールの地名」とされている。『漢字源』(第四版 学研教育出版)では「ホウレンは、唐宋音ホリンのなまったもの」とある。これを見る限りは「ハウ」という読み由来にはまだ不明瞭なところがある。

そもそも漢字表記で「法蓮草」と書かれることもある。周知の通り、「法」はその呉音ホフが仏教関係の語、漢音ハフが法律関係の語に用いられる傾向があった。したがってここで合音に読まれたとしても、それは全く不思議なことではない。

②造1：荷包 風造(フウゾウ)？(フザウ)？

大友(1963)と京都大学文学部国語学国文学研究室(1961)ともフウゾウと読む。『日国』では「ふぞう：沖縄で布製の女持タバコ入れ、南九州で財布、巾着(きんちゃく)をいう」としている。また、方言によってフウゾウと読むところもあるが、音注漢字の「風」は後の濁音のために使われている。中国語の「荷包」の意味は財布や巾着で日本語と同じである。

フゾウはどういう語であったかが分からないので、開合の判断は難しい。「造」[ao]で当てられたことから考えれば開音であった可能性もあるのではないと思われる。

3.2.1.2. 混同らしいもの

開音が期待されるところを合音で記録する箇所には次のものがある。

- 火1: 確 火羅骨 (ハウラク) > (ホウロク)
 婆4: 大舅 牛婆阿尼 (ニョウバウアニ)
 小舅 牛婆何多多 (ニョウバウオトト)
 大 (女+近)⁽²⁷⁾ 牛婆阿尼搖密 (ニョウバウアニヨメ)、
 小 (女+近) 牛婆何多多搖密 (ニョウバウオトトヨメ)
 蛾1: 涼鞋 恭蛾 (コンガウ)
 俄1: 女鞋 公俄 (コンガウ)⁽²⁸⁾

この7項目は合音に使うべき漢字「火」「婆」「俄」「蛾」が開音に当てられている。「確」の項目について大友(1963)はハウラク、京都大学文学部国語学国文学研究室(1961)はハウロクと読んでいる。『日国』では「炮烙・焙烙」の項目に「ハウラク」と「ハウロク」の二つの読みが記載されている。後者には「素焼の平たい土鍋」とある。「確」はその意味に解されるであろう。音注漢字「羅」[lo]もラよりロに相応しい音であるから、「ハウロク」を写していると判断してよい。問題は音注漢字の「火」[ho]が開音ハウに使われるところであるが、『日葡辞書』では「Fôrocu (ハウロク) 土鍋」のように合音としており、『日本風土記』の写音と合致するので、合音に統合したように思われる。

「ニョウバウ」の「バウ」に「婆」を用いることについては、下に述べる『日本館訳語』の「妻 弱波 (ニョウバウ)」が、合音によく使う「波」[o]を「バウ」に用いるのと同じである。キリシタン資料の『天草版平家物語』(1593)でも、「女房」は *nhöbô* と *nhöbö* の両方に綴られている⁽²⁹⁾。以上の2例が他資料でも合音になるのは偶然なこととは考えにくく、早く合音になったのではないと思われる。

ところで、「婆」「俄」「蛾」の三字は濁音の音節であることに注意しなければならない。森田武(1993)によれば『日葡辞書』では *on*→*ö・ô*, *ö・ô*→*on* の交替が見られるという。例:

Bonuocu (茅屋) バウオク > ボンオク

濁音音節の開音は、ほかより早く合音に統合したことが考えられる。

3.3. 呉方言資料に見られる開合

3.3.1. 呉方言資料の共通特徴

以上、呉方言の資料『日本国考略』『日本図纂』『日本風土記』の写音において共通の特徴が見られた。

- 1、開音の多くは效撰の字[ao]で写されている。
- 2、中国語側の事情で效撰の字は拗長音の開音にも、拗長音の合音にも使われている。
- 3、假撰[ɔ]の字で当てられる例もある(例:「瓦」[uɔ] (ワウ))が、これは子音に配慮した音注で、必ずしも開音[ɔ:]であったとは言えない。ただし、「下」[yɔ] (ヤウ)、「話」[uɔ] (アウ)の例もある。
- 4、濁音が後接する場合、宕撰や通撰、山撰の字が使われる。
- 5、合音は果撰[o]をもっぱら使っている。短音も基本的に[o]であるが、假撰[ɔ]、宕撰[ɔŋ]を使う幾つかの例もある。

3.3.2. 開音の音価

全体において開音は效撰の字[ao]で写されることが多いので、基本的に[au]であることが推測できる。假撰の字[ɔ]で写される箇所は多くないけれども、そのあることは開音が[ɔ:]で実現されていたことを物語っている。

また宕撰の字[ɔŋ]で写されるところがあるのは、後接する濁音の入り渡り鼻音や鼻音子音を表わすためである(例:粉 唐那紫之(タウノツチ)⁽³⁰⁾)と考えられるが、濁音や鼻音の前の開音はより早く長音化を起こして合音と統合した可能性もある(例:大舅 牛婆阿尼(ニョウバウアニ))。

3.3.3. 合音の音価

合音について、まず『日本風土記』では、『日本国考略』に見られない写音法、すなわち二字音注で写すところに注意したい。

開音: 皇帝 華-戸(ワウ)⁽³¹⁾、道士 法-戸里(ハウリ)、硫黄 依活-戸(イハウ)

合音: 氷 過-屋里(コオリ)⁽³²⁾、十 多和(トヲ)、籠 龍-戸(ロウ)⁽³³⁾

開音に二字音注を用いるのはワ行、ハ行のところのみである。效撰[au]には[wau] [fau]の音節が欠如しているためであろう。これは開音の音価が基本的に[au]であったことを意味する。

これに対して、合音の二字音注には特に条件を見出すことはできない。中に「十」

は当時 2 音節であったことが知られており（例えば『日葡辞書』では「Touo トヲ（十）」とある）、二字音注で問題ない。この 3 例以外には同じ音環境においても果撰[o]の字によって一字で写すことが圧倒的に多い。『日本風土記』が写した合音にはすでに長音化したものが多かったのではないかと思われる。

開音が連母音で反映されることと合わせて考えると、果撰[o]をもっぱら使った合音の長音化（[ou] > [o:]）が開音の長音化（[au] > [ɔ:]）より先に起こったことになる。これは川上（1980）、豊島（1984）の結論と相違するが、後に詳しく述べることにする。

3.3.4. 短音の音価

短音の音価が[o]であることは、果撰の字が圧倒的に多く用いられていることから分かる。ただし、以上の呉方言の資料において、例は多くないが、短音[o]に対して假撰[ɔ]の字を用いたものがある。開合の混同の問題においてオ段短音は重要視されず、開音とも合音とも、これについて論じられることは多くなかった。しかし短音を切り離して開合の問題を考えることは決して適切ではない。

音声的な面から言えば、一般的に/o/と/ɔ/の対立がない言語における[o]は、対立のある言語の[o]より広めであり、厳密に表記すれば[ɔ]である。そのために、呉方言を話す人の耳には、時に短音が広い[ɔ]に聞こえるわけである。短音が厳密な[o]でなく、時に[ɔ]としても聞かれるということは、当時のオ段長音に[ɔ:]と[o:]の両形態があったとしても、弁別的關係にあるとは言い難いであろう。

3.3.5. その他：ア行開音の頭子音

キリシタン資料ではア行開音を Vö (uö)、合音を Vô (uô) としている。室町時代のオが[wo]であったことは周知のことで、オオ・オウが長音化し、[wo:]として実現していたとするのは音声学的にも説明しやすいことである。しかし、ア行の場合、アウ・アオが長音化し、[au] [ao] > [wɔ:]という変化が起こるのは何かの理由がなければ考えにくい。

呉方言の資料にはア行開音は多くないが、次の例では皆 u 介音のある音注漢字が選ばれている。

[uɔŋ] : 扇 黃旗 (アウギ)

[uɔ] : 陸奥 話収 (アウシュウ)、青方 話哈嚙 (アオカタ)

呉方言においては假撰には[uɔ]と[ɔ]、宕撰には[uɔŋ]と[ɔŋ]の対立がある（ただし、果撰では[uɔ]がなく、[ɔ]のみである）。以上の 3 例はア行開音に頭子音[w]が存在していたことを物語っている。まさにキリシタン資料の表記 Vö (uö) を裏付けること

になる。

そうなると、ア行開音が[ɔ:]ではなく[wɔ:]として実現する理由を考えなければならぬ。筆者は[ɔ:]と[o:]とが弁別的な音素でなかったからこそ、そのようなことが起こったのではないかと考える。

もし開音が音素として成立していたとしたら、ア行開音は音変化に基づく特徴を持ちながら、合音との区別を保つので、合音の音声に近づく必要などなかったはずである。しかも[w]はア行開音の長音化する中で余剰的なものである。それに対して、もし開合の対立がなかったとしたら、開音[ɔ:]は合音[wɔ:]とともに一つの音素/o/と意識され、そこで合音の音声形態に引かれ、[wɔ:]のように発音されるようになることもあり得るのではないか。要するに、これは開合が弁別的対立ではなかったということの一つの根拠になりうる。

3.3.6. まとめ

以上を総じて言えば、アウ連母音、オウ連母音が長音化し、いわゆる開音[ɔ:]と合音[o:]になってから、初めて統合が起こるというのではなく、アウ連母音の一部が長音化を起こしながら、同時に合音への統合も始まっていたということであろう。したがって $au > ɔ: > o:$ という橋本説に従うとしても、 $ɔ: > o:$ という段階は短かく、 $ɔ:$ と $o:$ の対立が不安定であったことが推測される。合音に統合した開音の例からみると、使用頻度の高い和語や、動詞意志形のものであり、これらは漢語より早く統合を起こしたのではないかと思われる。

3.4. 『日本館訳語』

『日本館訳語』の所拠言語、すなわち北方方言は/o/と/ɔ/との対立を持たないので、呉方言の資料に比べて、開音の様相を明らかにするのは難しいが、大友(1963)、福島(1993)の指摘の通り、『日本国考略』や『日本風土記』より高い比率で開合を書き分けているのがこの資料の特徴である。次には、大友(1963)と京都大学文学部国語学国文学研究室(1964)をもとに、『日本館訳語』の開合の音注をまとめ、改めて検討したい。

《開音》⁽³⁴⁾

蕭豪韻 [au]稿 9 (カウ) / 刀 1 (タウ) / 毛 2 (マウ) / 老 3 (ラウ) / 敖 1 (ワウ) / 道 2 (ダウ) / 糟 2 (ザウ) / 酪 1 (ラウ) / 各 2 (カウ)⁽³⁵⁾
 [ieu]約 1 (アウ) / 交 2 (キヤウ) / 燒 2 (シャウ) / 照 2 (チャウ) / 苗 1 妙 1 (ミャウ) / 遶 1 少 1 蕪 1⁽³⁶⁾ (ジャウ) / 漂 2 (ピャウ)
 家麻韻 [a]答 1 (タウ)⁽³⁷⁾

- [ua]哇 1 (ワウ)
 歌戈韻 [o]阿 - 翁 3 (アウ)
 [uo]羅 1 (ラウ) / 倭 1 (ワウ) / 波 2 (バウ)
- 《合音》《オ段短音》
 歌戈韻 [o]鶯 3 (ゴ) / 各 11 (コ) / 各 4 (ゴ)
 [uo]倭 7 (オ) / 倭 10 (オオ) / 唆 10 (ソ) / 它 4 (ト) / 它 3 (トオ)
 / 那 91 (ノ) / 波 5 活 2 (ホ) 賀 1 / 活 1 (ホッ) / 羅 6 (ロ)
 [io]約 2 (エウ) / 弱 1 (ニョウ) / 約 7 (ヨ)
- 魚模韻 [u]吾 8 (オ) / 宿 1 司 1 孫 1 (ソ) / 著 1 (チョ) / 都 20 (ト) / 都 1
 (トウ) / 都 3 (ド) / 谷 11 (コ) / 読 1 (ト) / 福 3 (ホ) / 木 9
 (モ) / 木 1 (モッ) / 禄 2 (ロ)
- 東鐘韻 [uŋ]農 2 (ノ)
 [iuŋ]容 2 (ヨ)
- 真文韻 [uən]文 2 (オ) / 捫 3 門 1 (モ)
- 尤侯韻 [iəu]牛 1 (ノウ)
- 蕭豪韻 [au]刀 1 (ト) / 島 1 (ト)
 [ieu]交 1 (キョウ) / 交 1 (ケウ) / 少 2 (シヨ) / 燒 3 (セウ) / 漂
 1 (ヘウ)
- 家麻韻 [a]納 1 (ノ)

3.4.1. 蕭豪韻と戈何韻の音注漢字

『中原音韻』(元)、『韻略易通』(明)では、中古音の效撰が「蕭豪韻」という韻目に収められ、その音価は[au] (一二等)、[ieu] (三四等)と再構されている。現代北京語でも蕭豪韻が[au] (一二等)と[iəu] (三四等)であるから、北方方言における蕭豪韻の音価は大きな変化を起こさず、二重母音の形態を維持していることが分かる。『日本館訳語』でオ段開音に戈何韻([o][uo])の字を使わず、蕭豪韻([au][ieu])の字が使用されるのは、それが連母音[au]であったことを意味する。

一方、戈何韻の字はオ段短音及び合音に使われている。オ段短音と合音はそれぞれ[o]と[o:]とすべきである。ただし、魚模韻の字を短音に使用することも少なくない。この点は呉方言の資料にも共通しているところである。日本語においてオ段とウ段の母音交替がかなり激しかったことを反映していると思われる。今後なお検討したい。

ちなみにワウ[wau]の音注に、家麻韻合口の「哇」[ua]を使用したのは蕭豪韻に[uau]という音節がなかったためである。

3.4.2. 拗長音

拗長音についても呉方言資料と同じ写音特徴が見られる。つまり、開合を問わず、蕭豪韻（呉方言資料では效撰）の三四等の字が当てられている。例えば次のものである。

花椒 山焼 (サンセウ) 正月 焼哇的 (シャウグワチ)

3.4.3. その他

① 「老」

「艱難 非老世」「貧人 非老世那非多」という項目がある。大友(1963)はそれぞれ「ヒドシ」「ヒドシノヒト」、京都大学文学部国語学国文学研究室(1964)と福島(1993)は「ヒラウシ」「ヒラウシノヒト」と解説した。大友(1963)の解説には「老」の子音の問題や、母音の問題も生じてしまう。『日葡辞書』には「Firō : 疲れ〔中略〕また、比喻。貧しくて以前に持っていた家財や道具類もなくした人のことを言う」、また「Firōjin : 貧しくて家財道具などをなくした人」とある。『日国』には「疲労 : 貧しくなること。また、貧乏なこと」、また『時代別国語大辞典 室町時代編』には「疲労人 : 貧しいひと」とある。従って京都大学文学部国語学国文学研究室(1964)と福島(1993)の案に従うべきであろう。「老」はラウに相応しいものである。

② 「阿 - 翁」

アウを「阿 - 翁」で当てる 1 例がある。「阿」は歌戈韻で、主母音は[o]であったが、現代北京語では[x] (阿房宮)、[a] (阿童木) と両読されている。明代においても文語的には[o]、口語的には[a]と発音されたと推測される。ここは二字[a] [uŋ]でアウを写したもので、特に開合に問題があるとは思われない。

③ 「倭」

「鳳凰 夫倭 (ホウワウ)」のワウは開音である。ここは蕭豪韻に音節[uau]がないため、歌戈韻の音節[uo]を使ったと思われる。ワ行子音の写音を優先した例である。

④ 「刀」

「豆腐 刀夫 (タウフ)」のタウに「刀」[au]を当てた例が一つある。「豆」の呉音はズ、漢音はトウで、「豆腐」のトウは正しくは合音のはずである。大友(1963)はこれについて「納得できない」と述べた。だが、『日葡辞書』には Tōfu、Yutōfu があり、『文明本節用集』にも「豆腐タウフ」とある。「豆腐」は開音に発音されて

いたことが分かる。森田(1993)は「豆腐」が「唐布」ともされていたことを述べて、開音に記されたことの理由とした。ここの「刀夫」もタウフにふさわしい音注である。

3.4.4. 混同例

『日本館訳語』に開合の混同と見られる例はわずかであり、ある程度の写音規則に従う傾向が窺える。混同例には次のものがある。

斗 島 (ト)
 妻 弱波 (ニョウバウ)
 師伝 世農波 (シノバウ)

ニョウバウについては、バウに蕭豪韻の字が期待されるが、歌戈韻の「波」を用いるのが問題である。『日本風土記』や『天草版平家物語』でも「女房」は合音で記録されていることもあり、上述のように開音の濁音は早く合音に統合されたのであろう。従って、シノバウが合音で現れることも理解できる。ただし、「斗」については分らない。

全体を見渡すと、わずかの例外を除けば『日本館訳語』は開合の別を書き分けている。北方方言では[o]と[ɔ]の区別を持たないため、開音音価を確定する点においては呉方言資料に少し劣っているが、開音に主に蕭豪韻、合音や短音に主に戈何韻の字を使用することは開合がそれぞれ[au] [o]であることになる。また、濁音を伴う開音が先に合音に統合する点は呉方言資料と軌を一にする。

4. 音声学的検討と音韻論的解釈

4.1. 開音の音韻的価値について

朝鮮資料では、『伊呂波』(1492)においてはまだアウ連母音とオオ・オウ連母音がはっきり区別されていたが、『捷解新語』(1676)においてはその区別を失っていると言われる⁽³⁸⁾。中国資料では16世紀半ばまで開合の別は基本的に保たれていたが、中には混同と見られるものもあること、前述の通りである。

キリシタン資料、謡曲伝書からすれば、開音と合音の対立を音韻論的に考えることもできるが、開音と合音の長音化から混同までの時期を16世紀後半から17世紀前半までと考えれば、わずかに百年間であり、音韻変化としては速いものであろう。

川上(1980)は「[o]と[ɔ]の差がやや微妙すぎて、聞きわけ、言いわけするのに困難が大きすぎる。五母音で安定していた日本語が、一時期だけ六母音であったことは

考えられない」と述べ、開音を[o:]、合音を[ou]とした。豊島(1984)の再構も同様である。その根拠として、ロドリゲス『日本大文典』の「『ひろがる』ôは恰も oo と二字で書いてあるかのように発音する・・・『すばる』ôは大体に ou と書いてあるかのように発音するのであって」という記述があげられている。

[o]と[o:]の差が微妙であることは日本語話者自身確かにそう感じるであろう。しかし、例えば呉方言でも[o]と[o:]を区別しており、その区別を有する言語は決して少ないとは言えない。けれども、五母音で安定した日本語が、短い間に六母音になって、それからまた五母音に戻るということは確かに疑問に思われる。

現代日本の諸方言の中で、開合の別が残る方言と言え、次のものがよく知られている⁽³⁹⁾。

【表3】

	開音	合音
鳥取県	[a:]	[o:]
九州地方	[o:]	[u:]
新潟県	[ɔ:]	[o:]

長音化を伴い、鳥取方言では開音[au]が母音[a:]に、九州方言では合音[ou]が母音[u:]に統合されていることが見て取れる。この二地域において開合の別はあるものの、その音韻的価値は五母音の音韻体系に帰着している、ということが言えよう。

新潟方言においては開合の音価がそれぞれ[o:] [ɔ:]となっている。それは橋本説を裏付けるようにも見られる。豊島(1984)はその理由を新潟方言の七母音の音韻体系にあるとした。新潟方言は/a i u e ε o ɔ/という七母音の音韻体系を有している(ただし、[i]は子音と結合することが多く、[u]と[o]、[i]と[e]の母音交替も激しい事情があるといわれる)。 $[au] > [ɔ:]$ 、 $[ou] > [o:]$ という音変化の実現は円唇後母音/o/ /ɔ/に対して非円唇前母音/e/ /ε/が音韻体系内にあることに基づく。つまり、/ɔ/の形成には/e/という対称的音素の存在が大前提となっているというのである。これについて筆者も豊島(1984)の見解に従う。

類型論的にみると、/ε/と/ɔ/の対立及び併存は多くの言語に見られる。しかし、管見の限りには/o/と/ɔ/の対立がなく、/e/と/ε/の対立を持つ言語はある。例えば、東北方言においてアイ連母音が[ɛ:]、エイ連母音が[e:]となるのもその一例であろう。一方、/e/と/ε/の対立がなく、/o/と/ɔ/の対立のみある言語はない⁽⁴⁰⁾。つまり/o/ : /ɔ/は/e/ : /ε/を含意するものであり、/ɔ/の生起と定着は/e/に依存しているようである。前舌の調音空間が後舌のそれより広く、前舌母音も生成しやすいことはその理由として考えられる。新潟の西の地域において、/ε/がなければ/ɔ/もないということもその傍証である⁽⁴¹⁾。それゆえ、/ε/を持たないかつての日本語に/ɔ/が成立していたとは考えに

く。新潟方言における[au] > [ɔ:]という音変化は新潟方言自身の母音体系に基づくもので、五母音しか持たない、日本語の他の方言に通じる音変化法則ではない。

4.2. 開合の統合過程

一方、川上(1980)と豊島(1984)の再構音にも問題があることを言わなければならない。[au]が合音[ou]より先に融合して[ɔ:]となることである。それについて忘れてはいけないのは合音になる連母音の中にオウのほか、オオもあることである。オオが[ɔ:]にならず、アウが先に[ɔ:]になることは考えにくい。例えば、「十日(トヲカ)」[tookɑ] ([towokɑ])と「桃花(タウカ)」[to:ka]⁽⁴²⁾のように、開合を使い分けていた時代があったことになってしまう。

また、開音の長音化が合音のそれに先行することは弁別的素性の面からも説明しにくい点がある。それはすなわち、[a]は非円唇・広口、[u]は円唇・狭口という弁別的素性をそれぞれ持つ母音である。円唇性と開口度において[a]と[u]とは近似的母音同士ではない。それに対して、[ɔ]は円唇・半狭口の素性を持つ母音で、[u]とは比較的近似する母音同士である。近似的母音同士[ou]または同じ母音[oo]の連続では融合が起こらず、近似的でない母音同士の連続で先に融合が起こるとするのは合理的とは言えない。標準語においても、エイ連母音は長音化してエー、いわゆるエ段長音と発音されることは自然であるが、アイ連母音は長音化することはそれほど多くない。日本諸方言を眺めれば、エイの連母音は[eɪ]や[i:]で発音される地域もあるが、[e:]と長音化して発音される地域が圧倒的に多い。アイの連母音ではまちまちで、[ai] [a:] [æ:] [e:] [e:]のようにバリエーションを持っている。それは[a]と[i]の弁別的素性に相違が顕著であったからである。以上を要するに、アイ連母音よりは、エイ連母音のほうが長音化して[e:]になりやすいということである。当然、円唇の場合でも、アウ連母音よりオウ連母音のほうが長音化して[ɔ:]になりやすかったであろう。

【表4】

現代	
非円唇・半狭口+非円唇・狭口	エイ > エー
非円唇・広口+非円唇・狭口	アイ = アイ (エー)
室町末期	
円唇・半狭口+円唇・狭口	オウ = オウ ?
非円唇・広口+円唇・狭口	アウ > オー ?

上の考察を通して分かったように、中国資料では16世紀前半から後半にかけて、オ段の開合が区別され、アウ連母音が基本的に[au]、オウ連母音がそれより先に長

音化を起こして[o:]になったことを反映している。こうした音変化は音声学的にも説明しやすい。一方16世紀のアウ連母音の中には、すでに長音化したものもあって、その音価は[o:]または[o:]であった。アウ連母音は[au] > [ɔ:] > [o:]の順に音変化を起こしていたとみることができるが、いわゆる開音[o:]と合音[o:]との区別は音声的であり、開合の別を音韻的対立と見なすべきではない。

5. おわりに

以上、中国資料を利用して才段長音の開合の考察を試みた。16世紀前半においていわゆる才段長音の開合は大体区別されていたことを再確認し、開合の音価と音変化の過程について検討を行った。その結果、橋本説の通りにアウ連母音は[au] > [ɔ:] > [o:]との変化を経たが、アウ連母音の長音化がそれに先行して、[ou] > [o:]のように進行したと推定した。

アウ連母音の長音化は濁音音節を含む語や、使用頻度の高い和語において先に起こる可能性がある。ところが、五母音しかない日本語の母音体系内（新潟方言を除く）において、[ɔ:]は短期間に音声的に現われても、音韻的位置を占めることはとうていできず、すぐに[o:]に帰着することになったであろう。いわゆる開合の別というのはあくまでも過渡的音声現象にすぎない。最後に本稿の結論を以下のように示す。

開音 : [au] (/au/) = [au] (/au/) > [ɔ:] [o:] (/oo/)

合音 : [ou] (/ou/) > [o:] (/oo/) = [o:] (/oo/)

- (1) ただし川上(1980)は開音が音声上[o:]である可能性も排除できないとした。
- (2) aoという段階を証明する根拠がないため、豊島(1984)は*をつけた。
- (3) 19世紀、寧波に渡来した西洋人によるローマ字資料のことである。本稿で参考にしたのは、主として Rankin1868、Morrison1876、Möllendorff1901, 1910、Parker1884である。これらを一括して「寧波西洋人資料」と呼ぶ。
- (4) 徐通鏘(1990)の再構による。
- (5) 「大」は多音字であり、中古音でも蟹摂と果摂に属している。宣教師モリソン(Morrison)が編纂した寧波方言辞書に「BIG, do 大」があり、現在の寧波でも[do]と発音する場合があるので、ここのドウに当たる「大」は蟹摂でなく、果摂と見なすべきである。
- (6) 徐(1990)参照。

(7) しかし寧波方言音で英語を写音した英語学習書『英話註解』1860では、英語の母音[o] [ɑ]を效撰の字で当てることが多く見られる。例えば「高麗 Corea 高力也」「一元 One dollar 混淘拉」(順序：中国語 英語 英語音注)である。これは寧波方言における效撰はすでに現代寧波の[o]になっていたことを物語っており、他の資料と齟齬しているように見えるが、一方寧波西洋人資料のローマ字綴りの成立は1857年、それが基づいたローマ字綴りはそれ以前にできていた(馬之濤・屠潔群2013参照)ということから、そこに反映された発音は少し古い状態であったかもしれない。19世紀のこれらの資料に対してさらに対照的研究を行わなければならないが、『吾妻鏡補』『東語入門』に反映した他の呉方言をもあわせて考えれば16世紀における寧波方言の效撰は二重母音であった可能性が高いであろう。

(8) 效撰が[ao]であるから、開音も[ao]であるということにはならない。19世紀の寧波には[ao]しかなかったので、開音が[au]であるとしても、效撰の字を使うしかない。ここでは、開音の仮名遣い通りに[au]と推定する。

(9) 番号は京都大学文学部国語学国文学研究室(1961)と大友(1963)における寄語の通し番号である。

(10) 徐(1990)参照。

(11) △は音注漢字の解読を保留することを示す。

(12) 19世紀から現代にかけて假撰の主母音は[o] > [o]という変化を起こした。

(13) 趙元任(1928)、高志佩他(1991)参照。

(14) 現在ではさらに新しい文読[tɕia]もできている。

(15) 『日本風土記』ではタカイという字が「高」または「高」のような形をしている。一方、ウタの字は「哥」または「哥」のような形をしていて誤刻されたものと思われる。

(16) 「昂」は疑母[ng-]であり、ノに当てることには疑問がある。

(17) 『日本風土記』の所掲言語が寧波方言であると推測した松本丁俊・丁鋒(1998)もある。

(18) 大友(1963:367-383)参照。

(19) 「倭」は「逢東 倭子介(オオツカ)」に用いられている。鳥取県東伯郡琴浦町にある地名である。

(20) 大友(1963:552-558)、京都大学文学部国語学国文学研究室(1961:索引)参照。

(21) 大友(1963:558)では「ぼう」の項に「袍3」とし、「ぼう」の項に「袍1」とする。京都大学文学部国語学国文学研究室(1961)では「バウ」に「袍4」としており、大友の解読と異なる。具体例は「宮娥 国袍(クバウ)」、「教書人 識奴袍(シノバウ)」、「師父 識奴袍(シノバウ)」、「和尚 袍士(バウズ)」、「棒 袍子葉(バウツエ)」であるが、大友は「棒」の「バウツエ」を「ボウツエ」とする。しかし、「棒」は漢音がバウであり、『文明本節用集』にもバウとある。「袍」はすべて開音のバウとするべきと思われる。

(22) 「交」は「少」の誤刻か。

(23) 大友(1963)は「580 白絲 失類一多(シロイト)」、「371 銀匠 失類楷尼才古(シロイカネサイク)」などの「類」をロと解読し、オ段短音と見なしている。京都大学文学部国語学国文学研究室(1961)では「類」を「ロイ」と解読する。次の項目「城 失六(シロ)」、「後 吾失六(ウシロ)」では、ロに「六」を当てるし、さらに「白 失類(シロイ)」とあるように、ロイに「類」を当てている。止摂蟹摂合口ではi韻尾が残っていたと考えられるから、「類」は「ロイ」の音注と見るのが妥当である。従ってここでは「類」をオ段短音の音注と見なさない。

また、大友(1963)は「緑豆 阿回買密(アオアメ)」と読むが、京都大学文学部国語学国文学研究室(1961)は「アオイアメ」と解読する。次の項目「風正 回天那革熱(オイトノカゼ)」、「排草 尼回骨節(ニオイクス)」にあるように、「回」も「類」と同様にi韻尾を持つもので、オイと解読すべきである。従って「回」をオ段短音の音注とは見なさない。

また、大友が訛りとする音注(大友1963:552-558 丸のついた箇所)は誤刻などの可能性が高いので、ここでは扱わない。

(24) 「捺」は山摂であるが、ここではおそらく「奈」への類推からそれと同音になっていたであろう。

(25) 「楽」は「娼妓 紹楽(ジャウロ)」にある。大友はラウと読むが、『日国』に「女郎」ジョウロ、ジョロがある。ここでは、入声音の「楽」を使っていることから、短音のロを写したものと考える。

(26) 「所」は中古音に遇摂に属するものであるが、現代中国の諸方言では果摂の発音で読まれることが多い。

(27) (女+近)とはおそらく深摂(m韻尾)の「矜」の異体字であろう。母方のおじの妻のことである。呉方言では臻摂(n韻尾)と深摂が合流している。臻摂に属する「近」を借りて、「(女+近)」という字を作ったのではないかと思われる。

(28) コンガウ(金剛)は「金剛草履」の略である。

(29) 亀井(1962)参照。

(30) 『日国』に「唐の土：炭酸鉛を水で煮沸したり、硫酸鉛や塩化鉛を炭酸ナトリウムの水溶液で煮沸したりして得られる白色粉末。鉛白。ヒドロオキシ炭酸鉛」とある。

(31) 『日本風土記』の原本では「華弓」とあるが、「弓」は「戸」の誤刻であろう。

(32) ただし、「冰糖 過立索刀(コオリサタウ)」ではコオを「過」の一字で写している。

(33) 『日葡辞書』に「Rô ロウ(籠) 牢獄」とある。

(34) 『中原音韻』『韻略易通』『合併字学集韻』を参考資料とするが、韻目は『中原音韻』に従う。再構音は趙元任(1984)、葉宝奎(2001)、耿振生(1992)、佐藤昭(2002)を参考にした。

(35) 「酪」「各」などの宕摄入声字は宵豪韻に属すると同時に歌戈韻にも属し、当時に

おいても現代北京語と同様に、文白異読の現象があった。ここでは「酪」「各」が開音に当てられることから、宵豪韻に読まれたと推測する。

(36) 「和尚 吾蘇(ワシヨウ)」にある。静嘉堂本では「蕪」(「蘇」の異体字)、稲葉本とロンドン本では「蘇」としている。いずれにせよ、「蘇」をシャウに当てるのは不審である。静嘉堂本の「蕪」は恐らく「蕪」(宵豪韻[au])の誤植でジャウを写したのではないかと思われる。

(37) 「塔 答(タウ)」にある。「答」は多くタに当てられ、タに相応しいものである。タウに当てるのは何かの誤りであるように思われる。

(38) 浜田(1955)参照。

(39) 上野善道(1989)参照。

(40) ところで、異例を挙げてみれば、韓国語では/e/と/e/の対立が消失しつつあるが、/ɔ/と/o/の対立が保っている。しかし、実際には母音[ɔ]は円唇性が少なく、[ʌ]とも表記される。/ɔ/と/o/の対立よりはむしろ/ʌ/と/o/の対立であると思われる。また中国語の閩方言でも/e/と/e/の対立がなく、/ɔ/と/o/の対立がある。その[ɔ]も韓国語と同様に円唇性を欠いており、[ɣ]とも発音される。

(41) 剣持隼一郎(1983:248)。

(42) 『日葡辞書』では「十日 Tôca」と「桃花 Töca」としている。

【参考文献】

- 上野善道(1989)「音韻総覧」『日本方言大辞典 下巻』小学館
 大塚光信(1982)「開合音—キリシタン版の表記をめぐって—」『文学』岩波書店 50(1)
 大友信一(1963)『室町時代の国語音声の研究』至文堂
 大友信一・木村晟(1972)『東語入門 本文と索引』汲古書院
 大友信一・木村晟(1982)『吾妻鏡補所載 海外奇談国語解 本文と索引』汲古書院
 加藤正信(1967)「方言の実態と共通語化の問題点：新潟」『方言学講座 2 東部方言』東京堂
 亀井孝(1962)「『才段の開合』の混乱をめぐる一報告」『国語国文』31(6) 中央図書出版社(『日本語のすがたところ(一)』(1984)吉川広文館、所収による)
 亀井孝(1963)「『才段の開合』の混乱をめぐる一報告補訂」『国語国文』32(5) 中央図書出版社(『日本語のすがたところ(一)』(1984)吉川広文館、所

収による)

- 川上葵(1980)「アプからオーまで」『国学院雑誌』81(7)
 京都大学文学部国語学国文学研究室(1961)『日本風土記』京都大学国文学会
 京都大学文学部国語学国文学研究室(1964)『纂輯日本訳語』京都大学国文学
 会
 京都大学文学部国語学国文学研究室(1965)『日本寄語の研究』京都大学国文
 学会
 剣持隼一郎(1983)「新潟県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』国書刊
 行会
 高志佩他(1991)「寧波方言同音字彙」『寧波大学学报(人文科学版)』4(1)
 耿振生(1992)『明清等韻学通論』語文出版社
 佐藤昭(2002)『中国語語音史』白帝社
 徐通鏘(1990)「百年來寧波音系的演變」『言語学論叢』16、(『徐通鏘自選集』
 (1993)河南教育出版社所収による)
 趙元任(1928)『現代吳語的研究』科学出版社
 外山映次(1974)「近代の音韻」『講座国語史2 音韻史・文字史』大修館
 豊島正之(1984)「『開合』に就て」『国語学』136 国語学会
 中田祝夫(1979)『文明本節用集研究並びに索引』(索引篇 影印篇)改訂新版、
 勉誠社
 日本イエズス会編、土井忠生他訳(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店
 橋本進吉(1928)「吉利支丹教義の研究」『東洋文庫論叢9』(橋本進吉博士著
 作集第十一冊『キリシタン教義の研究』(1961)岩波書店所収による)
 浜田敦(1955)「国語音韻体系における長音の位置」『国語学』32 国語学会(『続
 朝鮮資料による日本語研究』(1983)臨川書店所収による)
 福島邦道(1959)「『日本寄語』語解」『国語学』36 国語学会
 福島邦道(1979)「音韻資料としての日本風土記」『日中語文交渉史論叢: 渡辺
 三男博士古稀記念』渡辺三男博士古稀記念論文集刊行会編、桜楓社(『日本
 館訳語攷』(1993)笠間書院所収)
 福島邦道(1993)『日本館訳語攷』笠間書院
 馮雪卿(1860)『英話註解』守拙軒、早稲田大学図書館所蔵
 馬之濤(2013)「『書史会要』與『日本考略』中所見吳方言的舌葉音」『黃典誠
 教授百年誕辰紀念文集』葉宝奎・李無未編、廈門大学出版社
 馬之濤(2014)「中国資料に見える室町時代のハ行子音音価の再検討一『日本
 国考略』を中心に一」『国語国文』83(4)中央図書新社
 馬之濤・屠潔群(2013)「訳註『寧波土話初学』(一)」『中国語学論集 開篇』
 32
 松本丁俊・丁鋒(1998)「『日本風土記・語音』中日対音考釈」『論集』47 駒澤
 大学

- 森田武 (1993) 『日葡辞書提要』 清文堂
- 葉宝奎 (2001) 『明清官話音系』 廈門大学出版社
- Morrison, W. T (1876) *An Anglo-Chinese Vocabulary of the Ningpo Dialect* 字語彙解, Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- Möllendorff, P. G (1901) *The Ningpo Syllabary*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press
- Möllendorff, P. G (1910) *Ningpo Colloquial Handbook* 寧波方言便覽, Shanghai: American Presbyterian Mission Press
- Parker, E. H (1884) The Ningpo Dialect. *China Review*, 13(3), Shanghai: Kelly & Walsh
- Rankin, H. V. V (1868) *Nying-po T'u-wô Ts'u-'oh* 寧波土話初学, Zong-hæ: Me-wô Shü-kwun

— 早稲田大学大学院文学研究科 博士課程 —